久米島の国・県指定史跡のグスク
―縄張りを中心に―

當眞　嗣一

1．はじめに

久米島のグスクについてはこれまで多くの人によって取りあげられてきた。たとえば、新城徳祐氏はその著『沖縄の城跡』のなかで7箇所のグスクの由来について文献や伝承などを引用しつつ述べているし[①]、また、沖縄県教育庁文化課では、久米島全域にわたって分布調査を行い13箇所のグスクを確認して分布図を作成するとともに考古遺物の出土状況やグスクの概要について報告している[②]。近年、法政大学沖縄文化研究所が実施した久米島調査のなかで、仲村昌尚氏によってグスクが取り上げられている。そのなかで氏は、久米仲里旧記や久米具志川間切旧記等の久米島の古文書を網羅して13箇所のグスクの特徴等について論評し、自説を展開している[③]。

今回の久米島総合調査では、これまで実施されてきた上記の調査成果を踏まえつつできるだけ多くのグスクを踏査し縄張り図を作成することによってグスク研究の基本資料の蓄積を図ることにした。幸いにも、久手堅稔氏を中心とする地元の方々の協力を得ながら限られた日数のなかでどうにか所期の目的を果すことができた。

グスクの縄張り把握を行うことでグスクの防御遺構を史料化し、地域史と在地構造を究明することを目的とする縄張り研究[④]の進展は、今回のようなグスクの調査の積み重ねによって進展していくものと考えている。

グスクの調査法には古文書や古記録などの文献調査、考古学的な発掘調査、地表面観察を主として行う縄張り調査、聞き取りを主とする民俗調査などいろいろな方法がある。ところが、これまでのグスク調査をみると、そのほとんどが文献調査と民俗調査によるものであった。考古学的な発掘調査は、多額な費用とある程度の長い調査日数を要することもあって気軽に実施できないのが難点である。その点、縄張り調査の場合には地表面観察を通してグスクの縄張り把握ができることから調査が容易に行えるという利点がある。とくに今回のように、調査期間が短く予算上の制約が多いときには、考古学的な発掘調査を実施することは不可能に近く、地表面観察を主とする縄張り調査が有効となる。発掘調査によらなくとも地表面に現れている遺構群を把握することでそれを図面化（縄張り図）し、グスクの機能や特徴、さらにはその性格や築城主体等についても明らかにすることができ、グスクを研究するうえで究めて有効な調査方法がグスクの縄張り調査である。今回実施した久米島でのグスク調査の大きな特徴はこの縄張り調査を主体にして実施したことである。

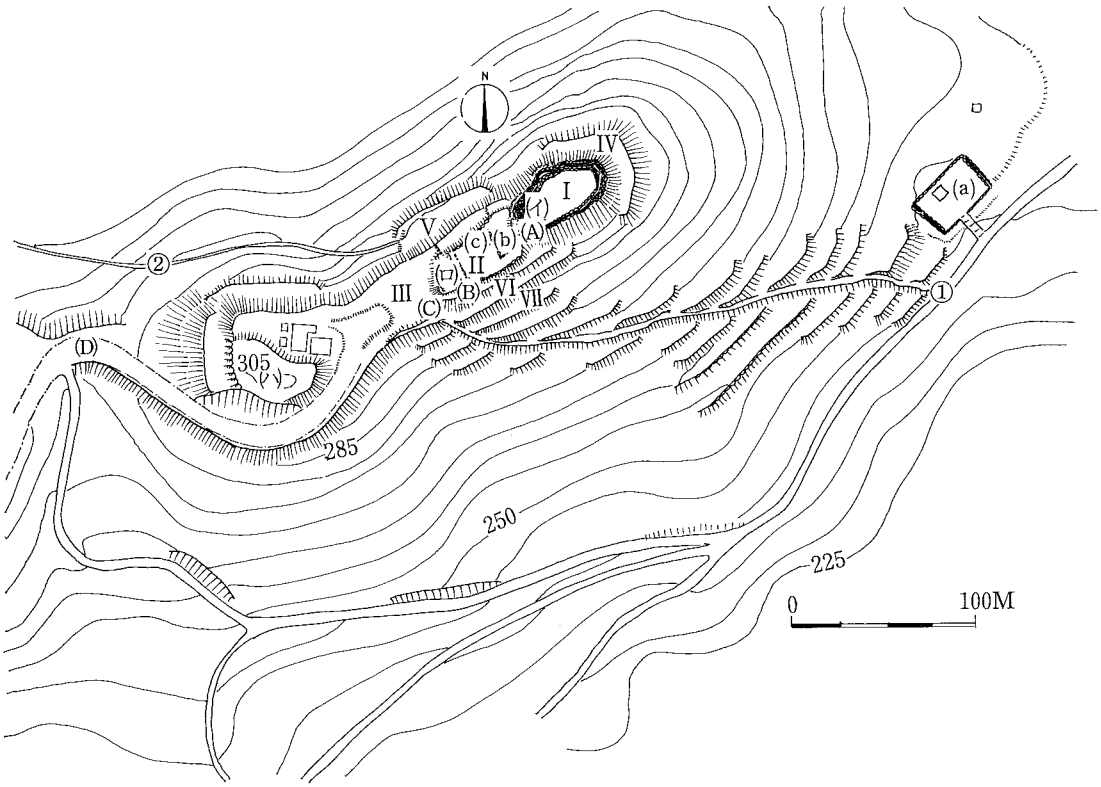
ブッシュをかき分けてグスクに入り、地表面に現れた遺構を把握しながら縄張り図を作成していくことはなかなか大変な作業である。とくに、ハブの多いことで有名な久米島ではハブの動きが鈍る冬の到来を待って調査を開始しなければならず、調査時期の設定に大きな制約を受けることになった。また、今回の調査についていえば、予算上の都合もあり、2ケ年にまたがる継続事業とはいえ実質は6日間という短い調査日程しかとることができなかった。このような厳しい状況にかかわらず、3つのグスクについて縄張り図が作成できたのは地元の研究者がグスク踏査に共に行動し応援していただいたおかげである。ここに記して感謝申しあげる次第である。

2．各グスクと縄張りの特徴

では各グスクの概要と縄張りの特徴について見ていくことにしよう。

宇江城城[5]（第1図、図版1～3）

現在の宇江城集落の東に聳える宇江城岳の標高310mの山頂に主郭を置き、その下に多くの腰曲輪群を配置する比較的大きなグスクである。このグスクは、久米島に所在するグス



第1図　宇江城城縄張図

図版１　宇江城城の遠景（東より）

図版２　宇江城城（Ｉの曲輪・物見跡といわれる石塁）

図版３　宇江城城の腰曲輪

クの中でも最も標高の高い位置に立地するグスクで、城内からの視界はよく、島の大部分が俯瞰できるばかりでなく、海上に慶良間諸島をはじめとして渡名喜、粟国の島々を望み、また、天候のいい日には遙か彼方に沖縄本島を眺望することのできるまことに気宇壮大なグスクである。

方音は「ウィグシク」という。かつて中城グスクと称されていたが、寛文７年（1667）以降、仲里グスクと呼ばれるようになり、その後、また宇江城グスクと改称され今日にいたっている[6]。『久米具志川間切旧記』によれば、伊敷索按司の長男久米仲城按司が築いた城だとされている。彼は、もと本中城という場所に築城計画をたてていたところ、オトチコバラという神女の神託による誘いを受けて、現在の地に改めて城地を変更したという。また、実際の城普請の指揮はムクチタルガニという人が行い、ティーヤントールという石工たちによって城が完成したという。つまり、城の選地はオトチコバラという神女、城普請がムクチタルガニ、石工がティーヤントールだったということである。

築城の年代について具体的には記されてない。落城については、中山王尚真による国家統一の過程で滅ぼされたとされている。

グスクは、略東西方向に走る尾根部を長軸にして、東側の先端部にⅠの曲輪、その西側の一段下がったところにⅡの曲輪を配置し、さらに下ってⅢの曲輪を置いて梯郭式になっている。山腹や城道の脇には多くの腰曲輪群が造られていて主郭部の防御ラインとして重要な役割を担っている。古老の話によると、Ⅲの曲輪の低くなったところには大手の城門

が東向きに開き、西には搦手が開いていたという。これらの城門遺構も今次大戦前までよく残っていたというが戦争によって一部破壊され、さらにその後、米軍基地建設等によって旧地形が損なわれてしまったとのことである。[7]

城壁は久米島特有の安山岩を板状の平割りにして高く積みあげてあるが、特にⅠの曲輪の部分は破壊されずに良く残っている。残った城壁の平面形態をよく見ると、コーナに突出部があり小規模ながら馬面の構造がとられていることがわかる。Ⅱの曲輪の東側よりには正殿の基壇が西面し、その前は平場となって前庭部をなしている。各曲輪では黒色土の遺物包含層が確認され、グスク系土器や１４～１５世紀に属する貿易陶磁器の破片が多量に出土する。

現在、Ⅲの曲輪には自衛隊の通信施設があり、史跡整備の妨げになっている。[8]

(縄張りの特徴)

遺構の特徴を縄張り図によってみていくことにする。

このグスクで驚かされるのは、主郭部を取り巻く腰曲輪群が無数につくられていることであろう。また、山麓の方から城内へ通じる大手道の脇に雛壇状にたくさんの小曲輪が造られ、侵入者に対して神経質なまでに警戒していることも大きな特徴点の一つである。

曲輪Ⅰは標高310m を測り、城内で最も高い位置にある。縁辺部には平割りの安山岩が高く積み上げられているが、なかでも東端部の方は石垣の幅も厚く、しっかりしていて物見台の跡という伝承がある。[9]また、西端部は一段高くなった岩山で櫓台(イ)になっている。(イ)からはⅡの曲輪が監視できるばかりでなく、曲輪Ⅰの虎口(A)も完全に掌握でき巧みである。同様なことは曲輪Ⅱの西端(ロ)でもいえる。

曲輪Ⅱには、高さ70cmの基壇(b)が西面し、その前には前庭部に相当する平場がみられる。基壇を伴う正殿と御庭という配置の形態は、首里城の正殿と御庭がその典型的な例であるがその他にも中城城や勝連城、今帰仁城、あるいは規模の小さい別のグスク等でも認められる。後述する具志川城の場合もまたそのような基壇を有す例である。

さて、この基壇の前には略方形になった石積み(c)がある。井戸という伝承もあるが[10]現状ではこのような高いところに水があるとは考えられず疑問が残る。ただ、正殿の屋根から落ちる雨水を溜める溜井の可能性もあり、発掘調査等を実施して遺構の性格を知る必要があろう。

地元の古老たちは曲輪Ⅱのことを「ナカグーイ」と呼んでいる。[11]したがってこの曲輪の名称については、今後ナカグーイ曲輪と呼ぶことにし後世に長くその名称を残して置く必要があると考える。

曲輪Ⅲは、自衛隊基地として使用され最近まで立入り禁止区域になっていたが、今では自由に出入りができるようになっている。曲輪Ⅲの西端は標高305m を測る小高い丘で頂上

部を中心に約50㎡ほどの平場が形成されている。この上に立つと、曲輪ⅠやⅡから死角となる西側の峰々を見通すことができ、周辺を観察するのに恰好な場所である。そのことから(ハ)は、物見の機能をもつ櫓台と考えてよい。また、(ハ)の直下には、西からの寄せ手に対して迎撃できるように削平地が作られている。この削平地の西端は、ちょうど尾根がくびれる位置にあって幅4 mしかない(D)。したがって、宇江城の城はこの尾根のくびれた位置に堀切を設けることによって完全に城の独立性を保ことができる。おそらく(D)の部分には尾根続きを遮断するための堀切が掘られていたのではなかっただろうか。今後、発掘調査等を行い堀切の有無について調べてみる必要があろう。

島の古老はグスク内の門、つまり虎口のことをジョンタと呼んでいる[12]。曲輪Ⅲのジョンタは東南東に向いて開いている(C)。このジョンタを出ると城外への連絡路となる城道(①)が山腹を縫いながら東に向かって伸び山麓へと続いている。山麓には城下集落としての城村が広がっていたようであるが、大正15年を最後に廃村になった。現在でも数箇所の屋敷跡と井戸等が残りその面影をわずかにとどめている。

大手道の入口脇には観音堂(a)がある。この観音堂は、『久米仲里旧記』によると当初、真謝にあったのがこの地に移されたといわれている[13]。観音堂の敷地を子細に観察すると、山の斜面を削平し周辺に石垣を張り巡らすなど堂々とした敷地空間になっており、観音堂の敷地にしてはあまりにりっぱに普請されているように見受けられる。おそらく、観音堂移転の前に別の用途として使われていたのではなかろうか。つまり、はじめから観音堂の敷地だったのではなく、当初は按司などが日常生活をおくる居住空間として使われていたのが、後世になって観音堂が移転してきたのではないかということである。宇江城との関連でいえば、山の上にある宇江城を山城とし、下方の観音堂の敷地を居館と考えれば、山城と居館のセット関係を有す城として把えることは十分可能である。大手道の取りつき方や、グスクと観音堂敷地との位置関係および城下集落のありよう等総合的にみると平地に居館、山上に城というセット立地が宇江城城の初期の形態だったのではなかろうか。

①の反対側、つまり北側斜面の連絡通路②は山腹を蛇行しながら字具志川方面に向かって伸びている。現在では通る人もなく雑木林に被われたままになっているが、かつて、「グシクグミ」の際に仲村渠や具志川方面から登っていく神道（チンベー道ともいっている）として最近まで具志川の神女たちによって利用されていたという。

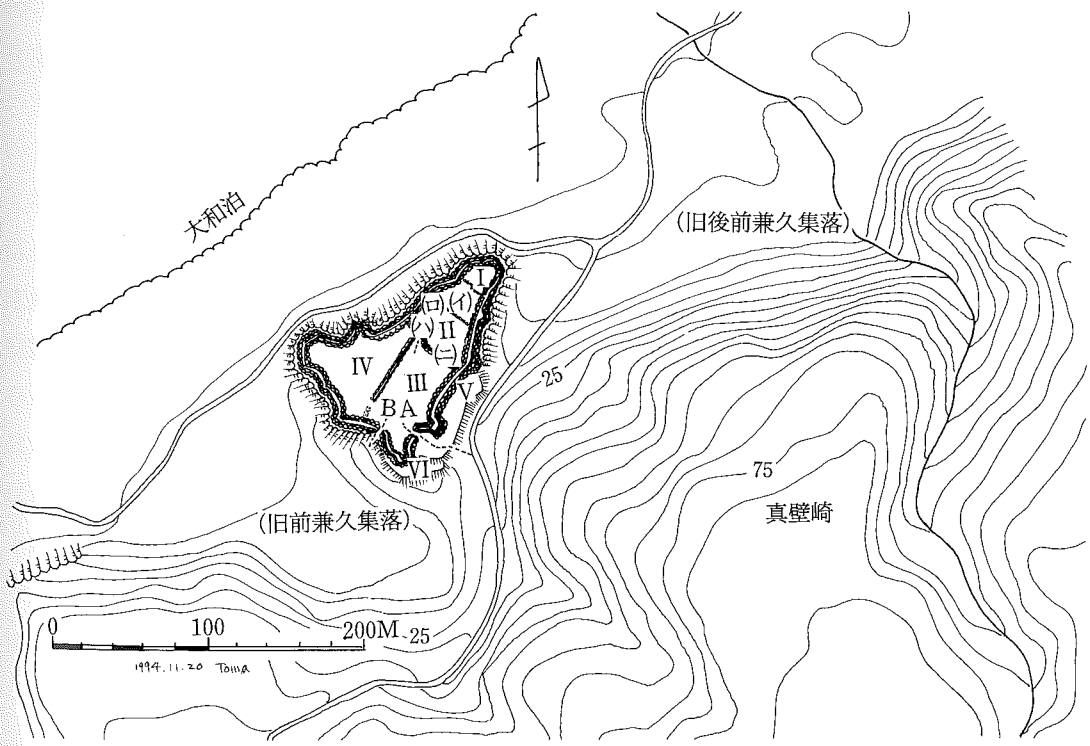
曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの虎口は、いずれも坂虎口となり東よりの崖縁側に取りついている。曲輪Ⅲの虎口(c)は、大手の城門（ジョンタ）で、幅2 m、奥行き約2.5m、高さ約2 mの石門が戦後まで残っていたというが、米軍基地の建設で破壊され現在では見られない。

虎口を出ると大手道が山麓に向かって伸びており、虎口のすぐ下に細長い腰曲輪（Ⅵ）が等高線に沿う形で取りついている。この曲輪からは、大手道を上ってくる攻城軍に対し

ての迎撃が可能であり、虎口の防御を意識して造られた曲輪であることがわかる。この種の機能を有する曲輪が大手道の脇には無数に造られている。なお、曲輪VIの奥側で碇石が発見された。地表面に転がっていたのを樹木の伐採によって発見されたもので、遺構の一部として再利用されているものではないようであり、何のためにここに持ち込まれたのかよくわからない。重量が約170kgもする重い石で、宇江城が機能していたころグスクに関連して運ばれてきた可能性は高く今後の研究がまたれるところである。この種の碇石は、「蒙古碇石」と呼ばれ、福岡県や佐賀県唐津市等では重要文化財として保護の手が加えられているものである。博多湾を中心に山口県や佐賀県、長崎県の沿岸地域で発見されており、時代は宋代から元代に属するものだと考えられている[14]。

具志川城[15]（第２図、図版４～８）

この城は、久米島の北西海岸にあり、環中国海に突出する琉球石灰岩の独立丘に営まれたグスクである。具志川城という名称のついた城跡は、この他に糸満市字喜屋武と沖縄中部の具志川市字具志川にも所在する。いずれも、海に突出する石灰岩独立丘に占地しているという共通点を有している。糸満市の具志川城と久米島の具志川城との間には後述するように伝承の上で関連があるとされている。



第２図　具志川城縄張図

図版４　具志川城全景（南より）

図版５　具志川城全景（西より）

『久米具志川間切旧記』のなかの具志川城の由来として次のように記されている。

「具志川城之儀以前は御嶽ニ而候処仲地村之住人仲地にやと申者楮剝用に彼所ニ参り見付帰宅之所真たふつ按司は南の方青名崎と申所ニ而城立御企有之石垣を積懸候最中右仲地御前江参り此所は狭殊ニ地形悪敷候北之方山有之候南北西は嶮岨にて東は少しひきて内広長にて地形能有之城立ニ而無双と申上候付則彼仲地御召烈御見分被成候処申出之通御悦喜無限御普請ニ而御移為被成由相伝有之候年来は久遠ニ而不相知候[16]……」。

これによれば、仲地にやという人の選地により、真たふつという按司が築いたとされているが、その年来については不明だという。その後、真たふつ按司の嫡子真金声按司の代になると、伊敷索按司の二男真仁古樽按司に乗っ取られたという。そのとき、城を乗っ取られた真金声按司は沖縄本島南部に逃れてきて城を築き、故名をそのままとって具志川城と名付けたと伝えられている。

城の滅亡については、中山王の尚真が進める中央集権化政策によって16世紀の初期に中山軍に滅ぼされ、それ以降は廃城となったとされている。先の『久米具志川間切旧記』には「首里軍具志川城を攻め取る事」として要旨次のように記されている。すなわち、「首里軍が久米島を攻めたとき、中城城（現・宇江城城跡）で合戦がはじまった。その時、父君のいしきなは按司は、自分の息子であるまたふつ按司へ警戒を怠るなという早や馬を出させた。その報せを聞いたまたふつ按司は、城の守備を厳重にすると同時に自らは中城支援のために軍を進めた。ところが、名城原[17]というところまできた時に中城城主の家来に出会い、もはや中城城が首里軍の手に落ち城内も火の海と化し按司も城を出て行方がわからなくなっているということである。そのことを聞いたまたふつ按司は、急ぎ具志川城へ引き返し首里軍の攻撃に備えて城の守りを固めていたら、３日後、首里軍が押し寄せてきて具志川城から４～５町離れた東南二方に陣を張って戦の準備をした。ところが、具志川城は堅固な城でなかなか落ちない、攻めあぐねていたところへ、具志川按司の乳父よなふしのひゃという人物が寝返り首里軍へ通じてしまった。よなふしのひゃが言うには、この城には水場がなく外の方から水路で引いてくるという。したがって、水路を断ち切ってしまえば落城するだろうとのことである。これを聞いた大将は大いに喜び彼にたくさんの褒美を下賜し、早速実行することにした。かくして、難攻不落の具志川城もよなふしのひゃという人の裏切りによって難無く滅びてしまった」というのである。家来の寝返りによって落城した話はよくあることであるが[18]、それにしても講談を聞いているようでなかなか面白い。このようにして、具志川間切旧記には久米島のグスク由来や城主たちのことが語られていて、グスク研究を進めていく上で貴重な史料になっている。

城郭は、やや三角形状を呈して、北、東、西の三方が断崖となっている。北側は環中国

図版６　具志川城の石垣（東より）

図版７　具志川城（大手の虎口）

海に突出し、南の方は内陸の方に接続する。城外からの景観は台形状になった大きな石灰岩の岩山のように見える。虎口は、南側のやや緩斜面にとりついている。天険要害の地に築かれたこの城は、四つの曲輪群で構成されているが、それぞれの曲輪は互いに低い石積みによって区画されている。城壁をなす石垣は、琉球石灰岩と珊瑚石灰岩および安山岩が利用されていて、積み方は野面積みを主体とするが、城門にあたる虎口部分と城内を区画する石積み部分でわずかに切石積みをみることができる。

考古学的な発掘調査はまだ実施されたことはないが、城内からは、14〜15世紀に属する貿易陶磁器が採集されることから築城時期の比定と海外貿易が行われていたことを知ることができる[19]。城の北西側城下には、「大和泊」と呼ばれる港を控えている[20]。

(縄張りの特徴)

周辺は天然の断崖によって囲まれていて、その断崖に沿って石塁が巡っている。石塁の高さは、北側と西側の鋭くきり立つ断崖面で低く、東側と南側の比較的緩い崖面では高く積み上げられている。寄せ手の侵入はもっぱらこの緩い崖面をもつ東側と南側に集中すると考えられるので、防御の重点がこの内陸部に置かれているは当然のことであり、石塁を厚くし、しかも高く積み上げられているのも納得がいく。石塁の規模は高さに比例して高ければ高いほど幅も厚く、がっちりしているが、低いところでは石垣の幅も細くかつ粗末な石積みになっている。

この具志川城も城としてはまさに天然の要害の地に立地し、難攻不落の城に見えるのだが、城内に水場を取り込んでいないことが城の運命を決定づけることになった。具志川間切旧記のなかにみえる城攻めの伝承もその辺の事情を伝えているのであろう。

さて、この城の北端曲輪Ⅰは城内で最も高い位置にあり、物見があった場所とされている。その南には曲輪Ⅱがあり、北側に基壇が認められる(イ)。発掘調査をしてないのではっきりしたことはいえないが、基壇の上にはりっぱな殿舎が建っていたのであろう。基壇の北に隣接して半円形の石塁(ロ)が認められるが、どういう施設があったか定かでない。基壇の前は広くなっており、前庭部の機能があったものと思われる。この曲輪Ⅱには、虎口が2箇所あり、1つはやや北より(ハ)、他は中央部近く(ニ)に開いている。虎口に取りついている石垣は直線ではなく、とくに、虎口(ハ)ではその脇に折りをつけ側面攻撃ができるように工夫されている。その点、虎口(ニ)は無防備であり、後世に改修された可能性が強い。曲輪Ⅱの南には高さ約1m、幅2mの石垣で仕切られた曲輪ⅢとⅣがある。曲輪Ⅲには、南側に城門Aと南南西側に城門Bがそれぞれ開いている。城門Aは南面し坂虎口となっている。城門に向かって右側の城壁は、南に向かって大きく突出していて、横矢を効かすように工夫されている。また、城門Bも城壁を大きく湾入させ合横矢になっている。

比嘉景常氏が昭和12年に地元の人たちと一緒に描いた具志川城平面図には[21]、喜名英晃老

図版８　具志川城（IIIの曲輪とIVの曲輪を仕切る石垣）

（大屋子職といっている）からの聞き取りで北端の突き出したところに大和への拝所真玉森、IIIの曲輪に首里への御通し金比屋武と園比屋武、IVの曲輪の西南隅に中国への拝所崎間森があることを記し、実際の位置についても真玉森を除き図面上にきちんとプロットをしている。曲輪IVには馬場と記している（第３図）。

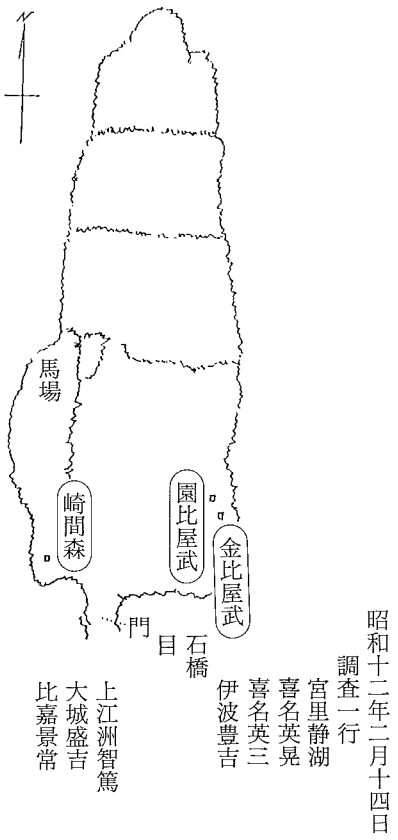
城門Ａに向かう右側には、城門に殺到する攻城軍を迎撃するための小さい曲輪Ｖが取りつき、また、左側の一段低くなったところには、城門ＡとＢに侵入して来る敵兵に対して側面攻撃できるような小曲輪VIを設けてある。曲輪Ｖ・VIともに石垣ではなく切岸になっている。

この城の弱点は、すぐ東に真壁崎と呼ばれる高い山が隣接していることであった。この山は標高84.2m を測り、山の頂上からは城内がまるみえとなる。伝承によると、城内には真壁崎という所から水路でもって水を引いていたようであり、水路を断ち切られたことで落城したことになっている。やはり、城の攻防の鍵は真壁崎にあったようである。

この城には、２つの城下集落が付属していたようである。城の南西に前兼久、北東に後前兼久である。前兼久の集落の前面（北側）には、大和泊や唐泊と呼ばれる港があり、具志川城と関連の強い港だったと思われる。『おもろさうし』巻十一の二七には、海外貿易によって栄えた具志川城の様子が次のように歌われている。[12]

一、ぐしかわの、まだまうちはげらへて、
　　よくげらへて、
　　まさりおわる、せたかご
又　かなふくの、まだまうちはげらへて、
又　たうのふね、ぜにこがねもちよせるぐすく
　　よくげらへて
又　やまとふね、ぜにこがねもちよせるぐすく

城内や今は農耕地になっている城下集落から多量の貿易陶磁器が採集されることは、前述したとおりである。これらの貿易陶磁器の出土によっても、海外貿易で栄えていた具志川城の様子を知ることができる。



第3図　比嘉景常氏作成の具志川城平面図

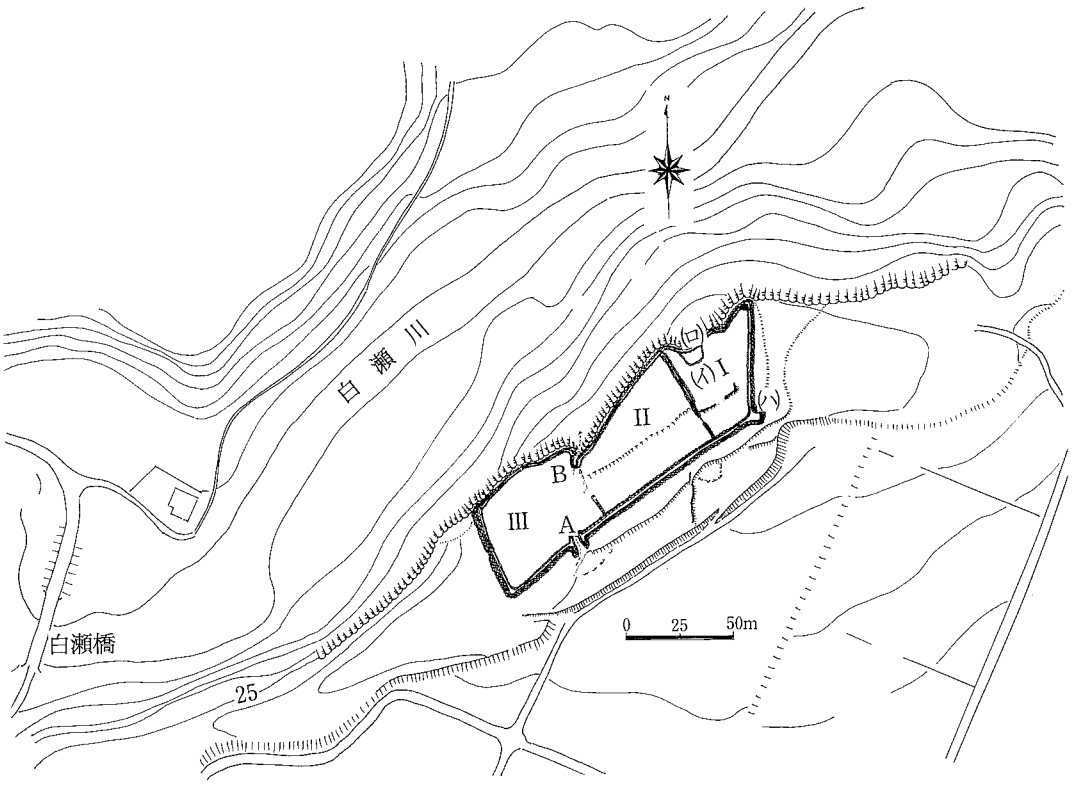
〈□内は城内の御嶽〉

伊敷索城㉓（第４図、図版９～13）

この城は、具志川村字嘉手苅北北西約700m のところにあるグスクである。宇江城岳に源を発し東北東から西南西に流れる白瀬川に沿う石灰岩の微高地に作られている。川に面するところは切り立つ断崖となり、その反対側にあたる東から南側にかけての面は緩やかな傾斜面となって平野部へと続く。断崖の縁辺には低い石積み、緩やかな面は幅が厚くしかも高く積み上げられた石積みになっている。また、内陸部に続く面には、数段の削平地を作り寄せ手が石垣に取りつくのを警戒している。

伝承によると、歴代の伊敷索一族が居城する城だとされている。城の創建者伊敷索按司は、もともと沖縄本島から渡って来た人であったとされ、この地に本城となる城を構え、長男を宇江城城、二男を具志川城、三男は登武那覇城の城主に配し、大勢力を張っていたというが、真偽のほどは定かでない。

廃城のことについては、久米島における他のグスク同様、尚真王の進める中央集権化政策の一環として各按司が滅ぼされるなか、やがて中山王の枠組みに組み込まれていって、ついに廃城になったと言われている。



第４図　伊敷索城縄張図

(縄張りの特徴)

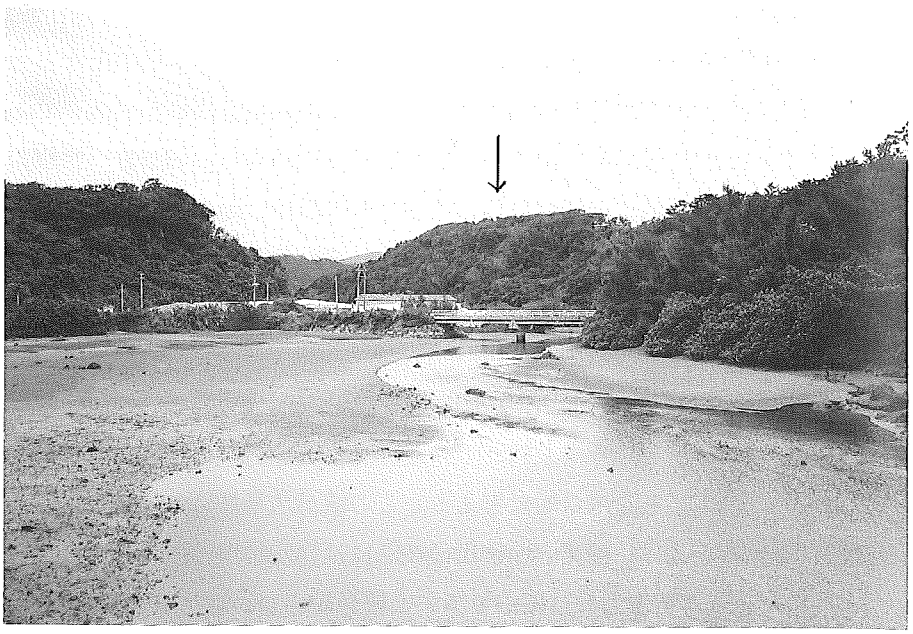
このグスクは、川という自然障害を防御に利用するとともに、最も弱点となる台地続きの面には高い石垣と数段の削平地を付属させることで防御効果を高めたグスクである。久米島のグスクの多くが、比較的高い山の頂上部かもしくは独立丘の切り立つ断崖の上に築かれているのに比べこのグスクの場合には地形的にも平坦地の延長線上に立地している。つまり、グスク立地上防御効果の脆弱な地形に占地しているのである。では、何故そういう場所にあえてグスクをつくらなければならなかったのか、伊敷索城の機能や性格を考える鍵はその辺にあるように思われる。

伊敷索城南壁側の障害となる白瀬川河口部には唐船池（トウシングムイ）と呼ばれる深みがあり、近くには兼城泊という港を控えている。また、城内からは多量の貿易陶磁器が採集されている。以上のことを総合的に考えるとこの城が久米島における海洋貿易の拠点だった可能性はきわめて高い。事実、曲輪IIIの北隅には、白瀬川の川べりから荷上げ可能な場所も取りついている(B)。唐船池に停泊していた貿易船からハシケに移された貿易品は、白瀬川を数百メートルさかのぼりこの(B)から城内に運び込まれたのではなかっただろうか。

伊敷索城は、前述のように白瀬川に沿う形で北東から南西を長軸にして立地している。北東側に位置する曲輪Ⅰは、幅2～3m、高さ1m前後の石積みによって曲輪IIと区画されたほぼ台形状の曲輪である。この曲輪のほぼ中央には基壇状に平坦に造成された(イ)が認められる。この基壇状の遺構は、前面部との比高が約80cmを測り南南西に面している。表面の左右両脇に野面の石積みがわずかに残っている。おそらく平らな面の中央にはこの城で最も重要な基壇建物が建っていたことであろう。曲輪Ⅰの虎口が基壇状遺構(イ)に向かってすぐ左（南側）に開いている。

また、この基壇状遺構の北東側、つまり城の北側城壁に接するところに略方形状の石積み遺構(ロ)が取りついている。現在は中央に香炉が置かれ拝所として信仰されているようである。しかし、しっかりした石組みで櫓台のように造成されているところを見るとはじめから拝所だったか疑問が残る。遺構の上面はほぼ平坦となり人頭大の石灰岩塊を蜜に詰め込んで台状にきちんと造成されていることからすると櫓台であり、その上に望楼が建っていた可能性は十分考えられる。事実、この位置に立てば白瀬川とその河口部が見下ろせるばかりでなく、北に広がる平野部が一望のもとに見通せるようになっている。また、石積みの上には礎石を思わすような板状の粗粒砂岩が数枚確認される。望楼の礎石などに使用されたものではなかっただろうか。

曲輪IIは曲輪Ⅰの南西側に隣接した曲輪である。この曲輪は長軸に沿う形で比高差40～50cm程の段差がついていて二段によって構成されている。さらにその隣には曲輪IIIがある。曲輪IIとIIIとの区切りは明確でないが、よく観察すると北と南の城壁からわずかに仕切り



図版９　伊敷索城（白瀬川の河口から望む）

図版10　伊敷索城（東に展開する平場と切岸）
※切岸は後世の改変をうけている

石垣の根石らしいものが中央部に向かって伸びていることが確認できる。この曲輪内にどのような建物が建っていたか考古学的な発掘調査が必要であろう。

曲輪IIIの西南西側の石垣は高さ５～６ｍ、幅５ｍを測り伊敷索城の城壁の中で最もしっかりしている。ここの城壁が高いのは、比較的高い峰に接続しているからであり、この高い峰から寄せ手が侵入して来るのを警戒してのことである。南東側に大手の虎口Ａが開いている。虎口の両脇には石垣が崩落したともつかない状態で石灰岩塊がわりと広い範囲に盛られている。石の状況を注意深く観察すると、虎口をガードする形で両脇が高い石垣になっていて、合横矢が効く仕掛けになっていることが理解される。虎口の前方はやや斜めになり前面に広がる削平地につながる。したがって、攻城軍がこの大手道を通って虎口に入って行くには、城壁側に左脇腹を晒すような恰好をとらなければならず、そこにも築城者の防御上の意図がうかがえる。

ところで、前述したようにこの城の最も弱点となる部分は東から南にかけての平野部につづく面であるが、この部分には城壁に沿って幅25～30ｍの削平地を設けてある。削平地の周辺平地との比高差は約３ｍあり、切岸をつくることによって十分城壁となり得る高さになっている。削平地は１ｍ前後の切岸によって数段に分かれていてけして平坦ではない。また、ところどころに根石の跡があることから、削平地部分はかつて複雑な構造をとっていたことが想定される。これらの腰曲輪群を城壁石垣の外側周辺に置いたのは、平坦部(内陸部)の方から押し寄せて来る敵兵が直接石垣に取りつくのを防ぐためであった。つまり、平坦部続きの弱点をカバーするために設けられたのがこれらの削平地だったのである。石塁の高さが３～４ｍもあるので城内から城の外を見ることも守ることもできない。だから攻城軍に対する防戦の場は石塁の上かあるいはこの削平地に限られることになる。そのような意味でこの削平地群は城にとって非常に重要な意味をもつ城域ということになる。

曲輪Ｉ南東隅の城壁には外に張り出した櫓台(ハ)が認められる。この櫓台は、城壁上からの側射をねらったものでもあるが、その他に、両端に伸びた石垣が見通せることから城兵たちへの指揮を取ったり、あるいは東側と南側の削平地の動向をうかがいながら敵兵の動向を監視する場所でもあったのであろう。この位置に櫓台を設置した築城者の意図は平地に続く面への備えを重視していたからであり、ここに城の機能を十分熟知した優れた築城主体者の存在が浮かび上がってくる。この種の城づくりはやはり戦いを経験したものでなければできないことであろうし、城つくりを専門とする集団か、城つくりの経験をつんだ人たちがいて、彼らの指導によってグスク普請が行われていたのではなかったかと筆者は考えている。

図版11　伊敷索城の石塁（Ⅰの曲輪の東側）

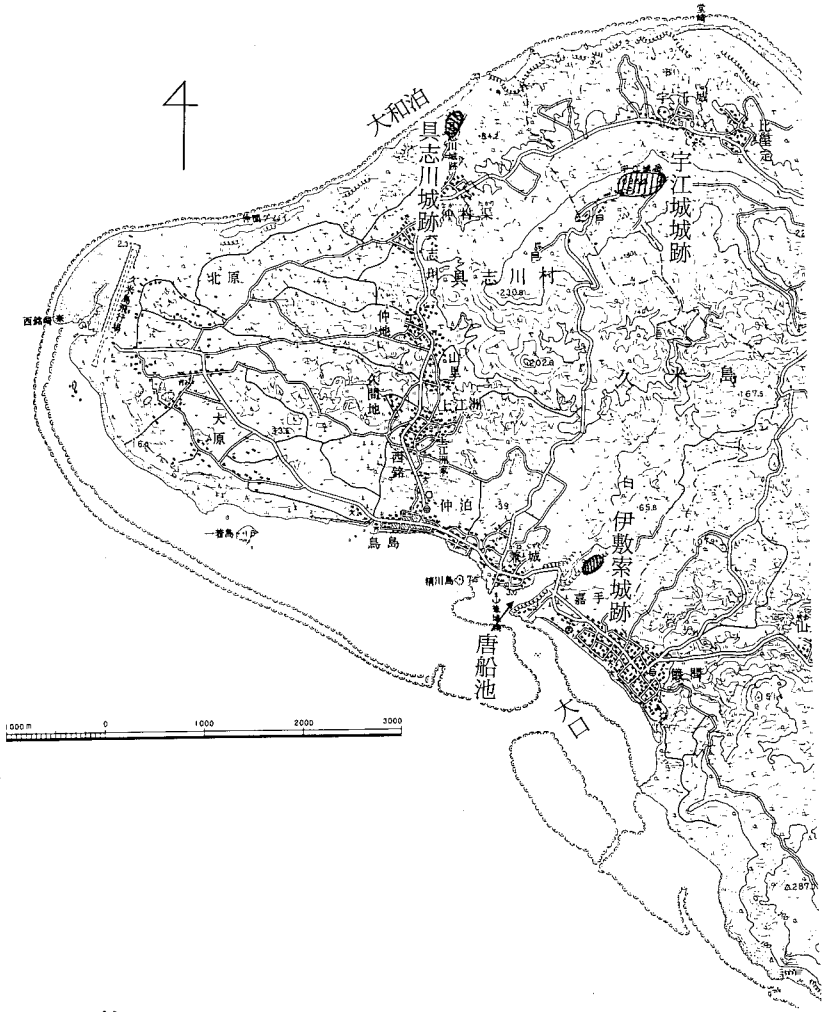
図版12　伊敷索城の大手虎口（城内より）

3．結びにかえて

以上、久米島の国指定史跡具志川城跡と県指定史跡宇江城城跡および伊敷索城跡の縄張りを示しながらその特徴について具体的に検討してきた。次に城のもつ構造的特徴から各城の築城目的を考えてまとめにかえたいと思う。

宇江城城の場合は、具志川城と伊敷索城と立地の上で際立った違いをみせている。すなわち、後二者の城が、海外貿易が有利に展開できる海岸べりに立地しているのに対し宇江城城は、島の内陸部にあってしかも島全域を掌握できる島内随一の高所に立地していることである。このような立地の違いは、城の性格を考える上できわめて重要であり、城が占地する特徴を細かく分析することによってその城の築城目的を明らかにすることができる場合もある（第５図　宇江城城・具志川城・伊敷索城の配置図)。

さて、宇江城城の東側の山麓には城下集落としての城村があった。この古島からは宇江



第５図　宇江城城・具志川城・伊敷索城の配置図

城城を仰ぎみる位置にあり、宇江城城の虎口へと通じる道も伸びている。また、城の北側山裾には堂・仲里・嘉手川の古島も展開している。宇江城城はこれらの各集落とセットになっており、城と村が密着し村を基盤に城が存在しているようである。それればかりでなく城の北側山腹を縫って伸びる城道②は具志川古島を中心とする久米島北西部の各古島にも通じていたようである。さらにまた、久米島の西に点在する古島等にも本中城や富祖古城等を介在して通じている。このように久米島の東西南北に点在する古島群は、この宇江城を中心に強い階級性でもって結ばれているように見える。言い換えれば、同時代の村の遺跡の多くが宇江城城を中心に強い求心性によって成り立っているということである。以上のことから考えると、宇江城は久米島という地域単位の拠点的なグスクであり、主として領民支配のために築かれた城として理解することができる。そのことは、次に述べる城の構造上の特徴からも看守される。

その一つは310mのピークを取り込んで築かれた主郭部をしっかりした石塁によって固め、石塁の要所には外側に張り出した櫓台を設けるなどの工夫がなされていること。次に、主郭部を中心にその周辺の斜面や山腹にも削平地を設けることによって攻城軍の侵入に備えていることである。各曲輪には腰曲輪と付属曲輪を付属することで防御を強化し、各方面からの敵に備えられた構えは久米島における他のグスクの追随を許さない構造になっている。とくに、大手道の守備は完璧で蛇行する道に横矢が効くように各コーナーの随所に削平地を置いている。この城はまさに拠点的な城としての風格をいかんなく発揮していると考えられるのである。

図版13　伊敷索城から出土した貿易陶磁器

その他に、曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの各曲輪から14～15世紀に属する貿易陶磁器が多量に採集されることや比較的厚い包含層が堆積している事実もこの城が拠点的な城であったことを立証している。

その点、具志川城や伊敷索城の場合は、在地の按司がその居城として築城したと考えるよりも、貿易の利権を重要視した集団や按司が自ら行う海外貿易の拠点として築いた城であった可能性は高い。だからこそ城の立地としてはけしていい条件とはいえない不便な地形にもかかわらず敢えて海岸に近い地を選んで城建てをおこなったのである。

具志川城の場合は石灰岩の切り立つ断崖の上に立地し防御性の強い城ではあるが、外洋に面していて海風が吹き荒れる海岸べりであることから領民支配の拠点には不向きな城である。しかし、近くには大和泊や唐泊と称される外洋船が近づくことのできる海岸があり、貿易船が航行する海上を掌握する構えで築かれていることは誰もが理解できることであろう。

伊敷索城は、前述したとおり白瀬川という自然障害を防御に利用している面と同時に、ウフグチ（大口[20]）と呼ばれる堡礁の大きな切れ目から入って来る貿易船を掌握する構えで築城されている。そのことは白瀬川の河口部に貿易船が停泊可能な唐船池（トゥシングムイ）があることからも理解できよう。

以上３つのグスクは、出土する貿易陶磁器の年代観から築城時期が14～15世紀であり、ほぼ同時期のグスクとして捉えることが可能である。このように、グスクの縄張りをとおして構造上特徴を細かく分析することによって、城のもつ性格や機能を明らかにし、当時のグスクネットワークの実体を浮き彫りにすることも不可能ではないのである。

註

① 新城徳祐『沖縄の城跡』　㈱緑と生活社　1982年３月。

② 沖縄県教育委員会『グスク－沖縄本島及び周辺離島－』　1983年３月。

③ 仲村昌尚「久米島のグスクについて」『沖縄久米島（沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究報告書）　沖縄久米島調査委員会編　弘文堂　1982年10月。

④ 拙稿　「グスクの縄張りについて(上)」『博物館紀要』№19　沖縄県立博物館　1993年３月。

⑤ 1974年１月28日に県の史跡として指定された。

⑥ 仲原善秀「久米島の歴史」『沖縄久米島（沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究報告書)』　沖縄久米島調査委員会編　弘文堂　1982年10月。

⑦ 前掲　註⑥

⑧ 仲里村『宇江城城跡公園整備基本構想調査報告書』　仲里村　1994年３月。

⑨　前掲　註③

⑩　前掲　註⑥

⑪　仲里村宇江城の平田ウサさん（明治22年生）の伝承。

⑫　前掲　註⑪

⑬　前掲　註⑥

⑭　鏡山猛「九州に伝来した宋代文物拾遺」『考古論集』　松崎寿和先生退官記念事業会編　1977年３月。

松岡　史「碇石の研究」『松浦党研究』　松浦党研究会　1987年。

⑮　1975年12月10日に国の史跡として指定された。

⑯　『沖縄久米島　資料篇』　沖縄久米島調査委員会編　弘文堂　1983年10月。

⑰　仲村昌尚『久米島の按司物語』　暁書房　1994年８月。

⑱　今帰仁城が滅びるときにも城主攀安知の腹心本部太腹の裏切りがあったという伝承がある。

⑲　グスクから出土する貿易陶磁器の様相は、14世紀の中葉から後半で急増し、15世紀頃でピークとなり15世紀から16世紀で減少する。

⑳　前掲　註⑥

㉑　比嘉景常『久米島紀行』（又吉真三氏がガリ板刷りにしたもの）。

㉒　前掲　註⑯

㉓　1961年６月15日に県の史跡として指定された。

謝辞

本稿を終えるに当たり、久米島調査に協力していただいた「久米島の自然と歴史に親しむ会」の上江洲正源氏、久手堅稔氏、佐久田勇氏、山城勇人氏の皆さんに謝意を表します。

とくに、久手堅稔氏と山城勇人氏には何回となくグスクに同行していただいた。両氏のご助力がなければ短期間に縄張図を描くことはできなかったであろう。ここに記して深謝申しあげます。